

「この時のためにこそ」

エステル記 第4章 12節～17節
ヨハネによる福音書 第12章 23節～26節

説教 本庄 侑子 伝道師

エステル記のエステルは、ユダヤ人でありながらペルシア王国の王妃となり、命がけの決断によってユダヤ民族を救うこととなった女性です。当時、ユダヤ人は国を失い、ペルシア王国の中に散らされていました。エステルを育てたおじのモルデカイは、エステルに自分がユダヤ人であることを明かさず、ペルシア王の王妃にまで上りつめさせます。

ある日、自分にひれ伏さないモルデカイに激怒したハマンの進言により、ペルシア王がユダヤ人根絶の法を発布します。王妃エステルなら、この王の決断を覆すことができるかもしれない。そう考えたモルデカイはエステルに伝えます。「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」(新共同訳聖書 第4章 14節)とは言っても、王妃が王に発言することも、自分から会いに行くことも禁じられていた時代です。王妃といえども殺されかねません。

エステルは揺れ動きながらも、それを突き破る決断へと導かれます。「わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。」(16節)そう言って、皆の祈りの中で王のもとへ進んでいくこととなりました。するとその先で、主が事を動かしてくださる奇跡を目にし、法は取り消され、ユダヤ民族は惨事を免れたのです。

「この時のためにこそ」の「時」とは何でしょうか。主イエスこそが「時」を意識して、地上の生涯をお送りになった方でした。「時がきた。」(ヨハネによる福音書 第12章23節)主イエスがそうおっしゃったのは、ご自分の十字架の死を目前にした時でした。また、当時救いの対象ではないと考えられていた異邦人が、主イエスに会いたいと願い出た時でした。

私たちにも時があります。エステルのように犠牲を厭わなくなる時がある。それは、この私を通して、主イエスから最も遠いと思える誰かが主イエスと出会うため、そのために自分が用いられると知った時です。主イエスと出会い、その愛を受ける時、自分の幸せ、自分の損得しか考えられなかった私が、私の命を誰かのために使ってほしい、そう心から言えるようになる。

大学時代に読んだ本、John Piper「Don't waste your life(あなたの人生を無駄にしないでください)」を忘れることができません。

『80歳を越える2人の女性がカメルーンで

亡くなりました。2人とも独身で、看護師と医者として、一つのことに命を注ぎ込みました。それは、病を得ている人と貧しさの中にある人がイエス・キリストを知ること。2人は村々を巡る途中、車のブレーキが壊れて絶壁の向こうに落ちてしまいました。即死でした。これは悲劇でしょうか？違います。悲劇とは何でしょうか。ある夫婦は5年前、早めに引退しました。今、彼らはトローラーに乗って遊覧、貝殻を拾います。これが悲劇です。これが悲劇なのです。

終わりの日、あなたを救ってくださった主の前に立つ時、主があなたの人生をご覧になる時に何と言うでしょう。「主よ。とても良い人生を送りました。私の貝殻コレクション、私のポートを見て下さい。」人生を無駄にしないでください。無駄にしないでください。』

洗礼を受けていただいた新しい命は、もう自分の幸せを求める命ではなくなっていました。そんなことのために生きる力なども湧いてこないのです。新しい命は、誰かの救いのために「わたしがもし死ななければならぬのなら、死にます。」と言い得るほどに、私たちの意志を引き起こし、自分の十字架を背負って主イエスに従う道に駆り立てます。ある人は言います。自分の十字架とは負いたくないものの全て。しかも負うべきもの。負わざるを得ないものだと。

キリスト者が送り出されるのは、誰かのために自分が犠牲になること一つ耐えることができず私自身から解放され、私と出会う人々が主イエスを知るためならば、自分が惨めな思いをすることなど何だということか、他の何のための命だということか、そう言い得てしまうようになった命の道です。モルデカイの声が聞こえてきます。あなたが今そこにいるのは、あなたを通してでしか主イエスと出会えない人がいるからではないのか。その人たちの救いのために、神があなたを置いておられるのではないのか。

世界は、自分の十字架を背負って主イエスに従う私たちを待っています。この人のために私の命を使ってほしい。この時のためにこそ私は生きている。そう断言できる愛を待っています。主は教会の「時」へと招いておられます。新しい命へと立ち上がらせ、喜びに満ちた命の使い道へと解き放ってください。復活の主イエスが、今朝も私たちと共におられるのです。

(記 本庄侑子)